



南丹市陸協通報

日本インカレで戦える競技力向上を目指して！

明治国際医療大学陸上競技部主将 齋藤 薫



男子ハンマー投でダブル入賞の田村君と若山君

平成27年4月より、本学において「スポーツ振興プロジェクト」がスタートし、陸上競技他5クラブが強化クラブ設定されました。

我が陸上競技部は、平成27年に10名の選手が入学し、当時20名でスタートしました。

平成28年に16名、平成29年に35名、平成30年に31名の選手が陸上競技部に入部。現在では選手83名、マネージャー8名、計91名と大所帯になりました。

学内には400m6レーンの全天候型トラックなど素晴らしい環境の中で木村篤史部長、安田賢司総監督を筆頭に8名の指導者のもと、毎日練習に励んでいます。

目標としては日本インカレで戦えるよう、京都・関西・西日本インカレに出場し、力をつけることです。今年5月に開催されました関西ICでは、男子が2部で総合4位に入賞しました。来年は2部で総合を勝ち取り1部昇格を目指しています。

6月の日本学生陸上競技個人選手権大会には6名の選手が出場し、男子ハンマー投で陸上競技部初の全国大会入賞者を2名（若山・田村）出すことができました。また9月に行われました第87回日本学生陸上競技対校選手権大会に4名が出場し、男子ハンマー投で若山・田村が出場し、若山が62m73を投げ6位に、田村が56m49（予選：61m58）を投げ11位入ることが出来ました。

医療系大学の、関西医歯薬、関西医科大学、全日本医歯薬獣医の各大会に参加し、すべての試合で男女とも総合優勝を勝ち取っています。

医療系の4学科（鍼灸・柔道整復・救急救命・看護）を持っている大学で、すべて国家試験があり、合格に向けて日々勉強をしています。競技との両立は大変ですが使命ですので頑張りたいと思っています。



南丹市陸協のプログラム編成



副理事長兼競技部長
宇 野 稔

南丹市陸上競技協会の前身である船井郡陸上競技協会が発足後 15 年の間、主催する競技会のプログラム編成作業は、紙の申込一覧表、個人票を郵送で受付し、それを利用して手作業で番組編成を行い、さらに手書きでプログラム原稿を作成するという手順で行っていました。

当時は、10 名ほどの役員が午後 6 時 30 分に集合し、午後 10 時を過ぎても終わらないことも度々でした。その当時はどこの市郡陸協も同じようなやり方だったと思います。

何とかプロ編作業の時間短縮、省力化ができないものかと知恵を絞り、平成 11 年度からパソコンを利用したプログラム編成を導入しました。京都では初めての取り組みであったと思います。

当時、齊藤記録部長が申込書を作成し、吉田会計（当時。後に副理事長）が申込書を自動的にパソコンに読み込み、番組編成、原稿作成まで、ほぼ自動的に行えるようにプロ編用プログラムを組んでくれました。また、同時期に吉田会計が当協会のホームページを開設し、そこから申込書をダウンロードし、平成 15 年度からはメールでの申し込みにしました。

これによってプログラム編成作業は、大きく省力化が図られることとなりましたが、一部の役員に負担がかかることになったことは否めませんでした。メールで申込書を受け取るのは競技部長である私の役割でしたが、記入方法に誤りがあるとマクロがストップしてしまうため、間違いがないか、チェックが必要となってきます。間違いがあると、各学校（チーム）に連絡を取り、確認をしなければなりません。また、プロ編用マクロを使いこなせる役員の養成も必要となりましたが、これも思うようには進まず、吉田副理事長に負担をかける結果となってしまいました。

吉田副理事長がお亡くなりになってからは、私が作業を担当してきましたが、昨年度から競技部員となった武内理事もプロ編用マクロを使えるようになり、協力して作業を進めることができるようになってきました。あと数名、マクロを使える役員を増やし、一人ひとりの負担を軽減することが課題です。

最後に、当陸協ではブログを利用して、各競技会や陸上教室の様子、競技ダイヤや注意事項、大会結果のお知らせなどを配信しています。ぜひ陸協ホームページにアクセスしてください。

アスリートインタビュー

明日をリード!



京都府立園部高校附属中学校 3 年

きたやま れ お
北山 礼於さん

2 年連続、走高跳で府下大会出場を叶えた京都府立園部高校附属中学校の北山礼於さんに陸上に対する思いをインタビューしました。

Q : 陸上競技を始めたきっかけは?

A : 小学生の時 6 年間、少年野球チームに所属していたが、走力が弱く、中学校に野球部がなかったこともあり、個人競技をやってみたいという思いと、走力を高めて体力をつけた上で、もう一度高校で野球が出来たらよいという思いで陸上部に入部したのがきっかけです。

Q : 走高跳を選んだのはどうしてですか?

A : 長距離ならできるという自信があり最初は長距離を選びました。しかし、学校の練習では、先輩について行くことが出来ず、南船陸上の 1 年 1500m では、ほぼ周回遅れの最下位となり、自分には陸上に向いていないと、陸上部をやめようと思いました。そのとき先輩に止めていただき、他の種目を選ぶことを進めてもらい、自分が楽しめそうで、できたら格好良さそうな走高跳を選びました。

Q : 府下大会に進めたときはどんな気持ちでしたか?

A : 陸上を続けてよかったと思いました。1 年生の時は、府大会を大きな壁と感じていましたが、2 年生の時、試技数差でなんとか 4 位に入り、大きな舞台で競技が出来るのだと考えると夢が叶ったような気分になりました。

Q : 陸上をしてきて良かったと思うことは?

A : 3 年間で 50m 走のタイムが 0.9 秒速くなり、体育祭のファイナルリレーに出ることができました。合同練習や招集待ちのときに他校の選手と交流することができたし、自分ができないこと、自分の限界を感じることができました。個人競技の楽しさも知りました。

Q : これからの目標は?

A : 陸上で身につけた体力・走力を失わないようにしたい。中学校では、「自分との戦い」に敗れてしまったので、高校生になったら何らかの形で、「自分との戦い」を制したい。



表彰を受ける北山君

2020 東京オリンピック・パラリンピックへの道 II

副理事長兼審判部長 内藤 竹司

2020年東京オリンピック・パラリンピックに南丹市陸上競技協会より、内藤竹司副理事長兼審判部長が跳躍審判員として参加されます。

これから、2020年東京オリンピック・パラリンピックが終了するまで、内藤氏の「オリンピック・パラリンピックリポート」をこの通報でお伝えしていきます。

2018年2月末、NTO（ナショナル・テクニカル・オフィシャル）の資格試験の可否メールが届いた。

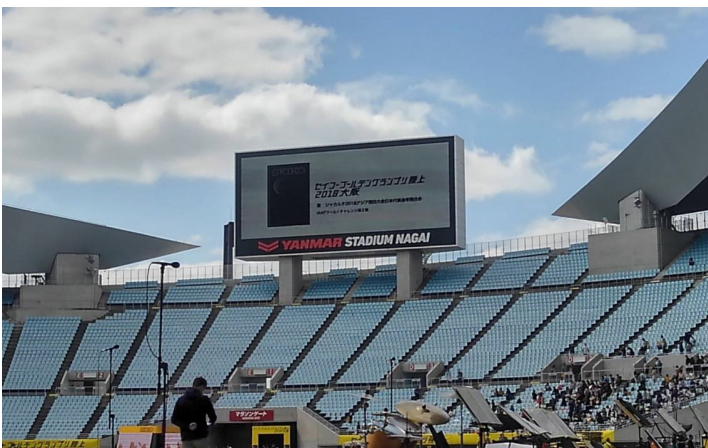
無事合格！その一週間後、内定通知もメールで届いた。ついにオリンピックへの参加が現実のものとなった。そのメールには今年度の実技研修の案内も記載されていた。5月20日に大阪のヤンマースタジアム長居で実施されるセイコーゴールデングラントリ陸上2018大阪である。担当部署は跳躍審判。その日が近づくにつれ不安や緊張感が増してきた。



内藤副理事長兼審判部長

大会前日は日本陸連が用意してくれたホテル京阪天満橋に宿泊し、5月20日早朝より長居陸上競技場に向かった。会場に到着しプログラムを見ると、なんと跳躍審判の主任は大学時代の同級生でよく知っている人物だった。無理を言って特定の競技審判に付かず跳躍種目全般を見たいと言ったところ、「今日は審判がいっぱいいるし、ええよ。」と返事が返ってきた。ラッキー！一流選手のパフォーマンスと各審判員の動きを好きだけ見られる。

棒高跳びのバーが自動で上がったり、走幅跳の計測が光波だったり驚くことがいっぱいだった。男子100mでは桐生、山県、ガトリンの一騎打ちも間近で見ることができ、充実した一日となった。



当日の夜にテレビ放映を見たが、砲丸投で日本記録が出たり、男子走高跳で日本記録に挑戦する場面があるなど、見どころが多くあったが、まったく放送はなく低レベルの男子走幅跳の映像がなぜか多かった。